

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25285226

研究課題名(和文) 高校中途退学者およびその親和者の進路意識と支援方策に関する 教育社会学的研究

研究課題名(英文) Educational sociological studies on career consciousness and support policy for dropout students in high schools

研究代表者

松田 恵示 (MATSUDA, Keiji)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：70239028

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高校中退者の背景を詳しく理解し、支援のあり方について、新しい観点から検討することにある。そのために本研究では、高校中退者や中退者の多い高校を対象に、聞き取り調査と質問紙調査から成る6つの調査を行なった。概して、高校中退者が在学した高校や家庭等の資源や経験知に依拠した中退者の進路選択が行われやすいことが明確になるとともに、それを活動に移すための「ケイバビリティ」が重要になることがわかった。相談・支援のできる他者との関係づくりを介して、選択のチャンスを活かせる環境作りが求められる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to understand the background of dropout students in high school, and to examine from the new perspective about how to support. Therefore, in this research, we conducted six surveys, consisting of interviews and questionnaire surveys. As a result, it became clear that dropout students in high school are easy to select courses that rely on the resources and experiences of high school and home who studied. Also, in order to overcome the problem, we found that "capability" becomes important. Reentry is not achieved if there is no "capability," such as human relationships with timing that translates into learning actions by the dropout.

研究分野：教育社会学

キーワード：高校中途退学者 教育支援 進路意識 進路多様性 支援方策 リスクファクター論

1. 研究開始当初の背景

近年、高校中退者に対する社会的関心が高まっている。例えば内閣府は2009年と11年に相次いで全国調査を行い、退学動機や退学評価等の結果を白書に掲載したが、それは中退率の上昇が教育機会の均等を脅かしているからではない。2000年度以降、その割合は低下し続け、10年度には1.7%、5万人台になっている。定時制通信制高校などの高い中退率の校種を除けば低い割合であり、米国のような移民子弟が多くドロップアウト率が高い先進諸国と比べると低水準と解釈できる。それならば、なぜ今日「中退問題」が改めて注目されるのか。

それは、社会的排除が強まるなかで、義務教育化している高校段階での学歴取得の失敗が、単なる教育経験や知識・技能の不足を越えて、就業の困難や家庭の崩壊、犯罪・疾病の助長など社会問題に直結する可能性が急速に高まっているからである。いいかえれば、勉学や学歴を介した貧困の世代間連鎖が起こり始めているからである。

90年代以降、中退問題の論点は、不登校生徒等の増加を背景に、不本意入学を初めとする偏差値輪切りによる入試体制の阻害状況と学校不適応者の拡大にあった。そのため、柔軟な学校生活への改善をはかる指導実践の必要性や多様化を重視した高校制度の改善など、「学校問題」の改善が推進された。しかしながら今日の問題は、終身雇用や社会保障など日本型社会システムが揺らぎ、学校教育を受け卒業しても安定した生活が保持されるとは限らない状況下で、高卒学歴がなければ社会の入口にさえ立てないという社会的排除の一つの姿なのである。卒業時の進路未決定者に象徴されるように、高校教育を安易に受けただけでは安定した将来の社会生活が保証されるとは限らず、なおのこと中退者は、就学・就業の困難を抱えて社会性の形成や社会参加の機会さえ失うことになりかねないという危機的状況にある。

これまでの中退者研究は、学校適応への処方箋を得るため、退学動機等に着目しその典型的把握に向かいやすかった。具体的にいえば、学力の不振と勉学への興味の喪失が指摘され、自己肯定感の欠如が追求された。対人関係の歪みがあげられ、いじめに代表される友人関係の困難や教師との関係悪化が指摘された。非行グループへの関与があげられ、学校生活への反抗と怠学による進級困難の問題が論じられた。学校のルーティンな生活リズムとの不具合が指摘され、昼夜逆転生活や不登校傾向を抱えて入学する者に保健室登校等の居場所としての学校の存在などが重視された。

他方で、進路先の変更という観点からみれば、個々人の学力やライフスタイルに合わせて、学習目標や指導方法が異なるサポート校や定時制等への転校が勧められやすく、あるいはアルバイトを通じた就業への意欲が喚

起される事例もあった。高校側にも自発的な退学と進路変更を奨励し世間体に配慮する傾向があったということである。従来の研究は、まとめていえば「高校不適応事例としての中退者分析」に主眼が置かれていたのである。

2. 研究の目的

そこで本研究の目的は、従来「高校不適応事例としての中退者分析」にのみ主眼が置かれていた研究の現状を再考し、リスクファクター論にヒントを得て、中退経験者がいかなる社会的属性や家庭環境、教育体験を有しやすく、また中退の前や後でいかなる社会経験をしやすいのかを実証的に把握することにある。いわば、「中退者の社会背景と生活経験の特質に関する総合的分析」を行う。

格差社会が深刻化するなかで、高校学歴取得の失敗が、単なる知識・技能の不足を越えて、就業の困難や家庭の崩壊など社会問題に直結するケースが多くなっており、貧困の世代間連鎖が起こっている。中退者の退学前後のキャリア・進路意識と支援方策への評価を詳細に分析することによって、困難状況に埋め込まれた当事者の目線に立った教育支援の方途が探究できると考える。

3. 研究の方法

本研究は、高退学率の高校を抱える2つの地区を中心に、中退者の生成するメカニズム・社会条件を7つの高校での3年間の量的・質的な継続調査と、地区の中学校教師等関係者やサポートステーション等利用者への質問紙・聞き取り調査から明らかにするものである。

従来の学校不適応に特化した要因分析ではなく、家庭環境や地域支援の状況等にも踏み込んだ分析とするため、並行して東京都下の中退者全員について高校ごとの分布と悉皆による意識調査および協力者の聞き取り調査を行うことによって、中退者全体の社会・進路意識や支援へのアクセス状態等も把握する。

「中退者の社会的特質に関する総合的な分析」をめざす本研究では、高退学率の高校を抱える2つの地区を中心に、主として6つの異なる対象者に対する量的および質的調査を実施した。

それぞれの調査概要は以下のとおり。

- ア. 高校中途退学者(2010-11年度)に対する悉皆の調査(約5000名対象):郵送による質問紙調査と協力可能者に対する聞き取り調査
- イ. 高校進路未決定卒業者(2011年度)に対する悉皆の調査(約1,500名対象):郵送による質問紙法と協力可能者に対する聞き取り調査
- ウ. 高退学率の高校7校(エンカレッジスクール、昼夜間定時制高校など)を対象とした生徒(平成2012-13年度入学生対象)へ

の悉皆による調査:3年間継続のパネルによる質問紙調査(1年次と3年次は年2回実施、計5回)と観察・聞き取り調査

- エ. 高退学率の高校を抱える地区の中学校教師(進路指導担当者)を対象とした進路状況(特に不登校生徒等)に関する聞き取り調査
- オ. 中退経験者本人およびその家族等の面接調査:10代・20代前半の若者でサポートステーションを継続的に来訪する者と保護者、機関の職員を対象とした聞き取り調査
- カ. 教育困難性の中にある中学校を対象としたアクションリサーチと卒業生の追跡事例調査

4. 研究成果

以下にいくつかの主な研究成果をまとめて示す。

(1) 高校中途退学者(2010-11年度)に対する悉皆の調査からは、①中退の主たる理由として、勉学の進捗・意欲というよりむしろ、学校を中心とした「対人関係」や「生活リズム」の不具合があげられやすいこと、②中退後すぐに次の進路に向かうのではなく、比較的長期のインターバル期間(学習も就労もしない期間)が存在すること、③支援機関の利用は相対的に低く、経済的支援を求める声が強いのものの、「就労」指向の中退経験者よりも「学習・就学」指向の中退経験者の方が従来型の相談中心の支援を活用する割合が高いなど、中退率の差異が大きい8タイプの高校群によって、中退後の進路選択が「学習・就学」指向と「就労」指向に大きく分化すること、などが指摘できた。

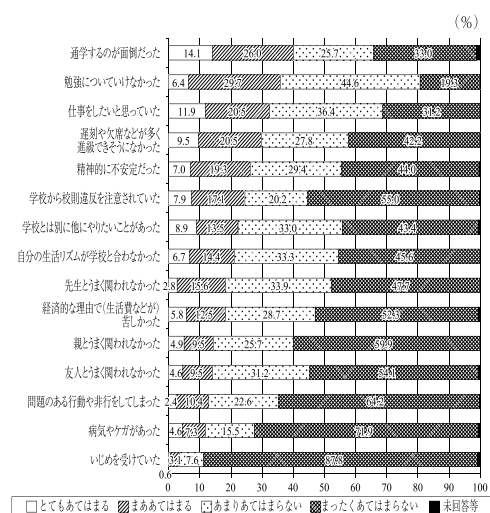


図1 在学中の高校生活の評価

(2) 高校進路未決定卒業生(2011年度)に対する悉皆の調査からは、進路未決定者に焦点を当てた場合、①進路未決定者の卒業後の進路(卒業後2年以内)は、高校中退者のそれと大

きな差がない。卒業して高校から離れると、困難を抱えたままで、特段の支援は得られていない。②進路未決定者も、中退者と同様、第一義的には高校での「生活リズム」の不具合を抱えていたと自認している。この課題は社会に出ても、容易には解消していない。③然し乍ら、進路未決定者は、中退者と違い、在学時には対人関係の援助や資源があったので「卒業できた」と自己評価しやすい。中退者の自己責任の語りとは異なって依存の効用が認められる、などが指摘できた。

(3) 高退学率の高校7校を対象とした生徒への悉皆による調査=3年間継続のパネルによる質問紙調査からは、①学年が進行するにつれ、自分にとって選択可能な進路から「専門学校」が大きく減少し、代わって「就職」「4大進学」が増加する。しかし、「就職」「4大進学」ともに減少し絞り込みがみられるX校と、専門からの入れ替わりでともに増加するY校で異なった変化の傾向もみられる。進路指導の実施方法等の影響があることがうかがわれる。②授業・部活動や対人関係、習慣形成など高校生活の14の項目についてみると、進路多様校Aを代表例にとると、「病気の時以外は遅刻や欠席をしない」や「宿題や提出物をいつもやっている」などが高い割合となり、概して進路多様校で生徒に求められている教育実践の質が垣間見える③項目への因子分析で負荷量の高い「自分のペースで学ぶことができています」などの項目が高い評価となっている。少人数クラスや基礎事項・ミニマムの学習などの実施が、回答にも反映している。さらに「学校は過ごしやすいですか」という質問に対して、進路多様校A・Bとの比較結果をみると、「とてもそう」では大幅な減がみられるようになっていた。また、「将来の進路に近づいていると思うか」では、「とても」「まあ」を合わせた割合でやや減少していることがわかり、退学者の頻出ともかかわる課題があると思われる。④生徒たちの家族の構成を調査してみると、父親の同居率は全体で7割弱、母親の同居率は全体で9割程度である。定時制がやや多いものの、高校タイプ間での差はあまりなく、全体にシングル(ひとり親)のファミリーが多い一方で、兄弟もおり、一人っ子は少数である。⑤経済的ゆとりを聞くと、1割強が「ゆとりあり」、4割が「ややあり」と半分程度の回答にとどまっている。経済力に乏しい地域の高校であることを加味すると、就学援助の極めて高い申請率(すべて90%超)など、経済格差の大きさをみてとれる、などが指摘できた。

以上のように、中退者の生成するプロセスを学校・家庭等の生活の文脈に沿って理解することで、将来の有効な進路選択にとって必要な教育的資源を探求していくことがいま求められているといえよう。

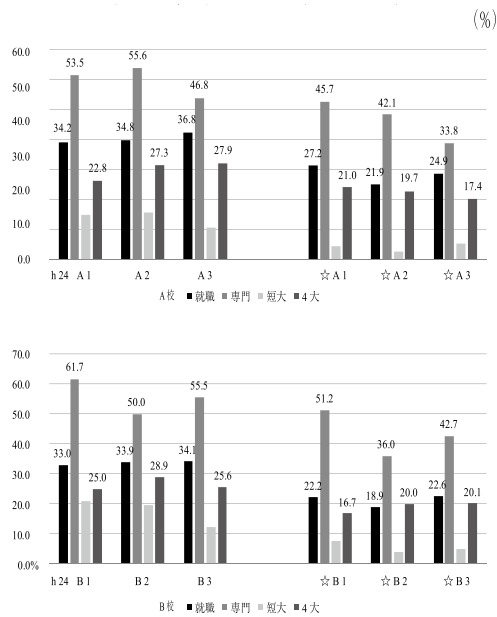


図2 2年次の進路希望

さらに、進路未決定者に焦点を当てると、以下のようなことが指摘できた。①進学決定者は、専門学校中心であり、1年生からその指向が強く「受験準備」は教科学習でなく、実利的な「面接練習」等を担っている実態がある。②就職決定者は、半数が1年生からその指向を有するものの、「専門学校希望」からの移動もある。就職者には、自分のよく知った地元での就職を希望する「地元志向」が見て取れる。③進路未決定者は、入学当初は就職指向がある場合が多く、学年進行とともに「専門学校志望」へと変化する傾向が見られる。④進路未決定者には、進路の選択準備に関わって「特に何もしていなかった」という「乗り遅れ現象」がある。

(4)聞き取り調査から代表的な知見をここではまとめておきたい。概して、これまで非正規で短期離職する中退者の就労のあり方が問題視されやすかったが、中退者の語りには就労自体の経験がもたらす自己の変化や「ささやかな自信」が語られやすかった。それは学校時代における「生きづらさ」の体験を払拭する要素を多分に含んでおり、職務の内容の高度さより、自分で裁量できる範囲の広さに依拠することが多い。就労による社会参加が、学校適応よりむしろ、「壁の低いもの」だったことの意外さが強調されているともいえる。職場や職務のよしあしとは別に、「働ける・稼げる自分」への変化を冷静に評価しようとする中退者の姿がそこにはあり、「ニートイメージ」と別な問題設定と支援のあり方が必要とされているといえる。

中退者の就労の「自己物語の構築資源」としての豊かさや、「対人関係資源」を拡張させる実態などが、この調査からは明らかになり、経済的文化的な問題性とは別に、中退者の「進路探索する力」に目を向ける必要性が

あることがわかる。

(5)教育困難性の中にある中学校を対象とした卒業生追跡調査(聞き取り調査)の一部を以下にまとめておきたい。まず言えることは、聞き取り対象者である、「荒れ」の中心人物であったAくんにとって、高校とはいくつかの糸が絡み合って編み上げられているひとつの「関数」でしかなく、「高校」という大きな物語から生活や人生が始まっているわけではないということであった。「頭足んなくて」たまたま「先輩に誘われて」、結構選択に失敗したとっていて、そこそこ欠席日数も多くて、続けていたサッカーもやめて、それほど親しい友だちもできず、けれど、信頼する他者からは資格取得など社会に出るためには必要だとアドバイスを受け、地域や家庭で出会うさまざまな人たちの「物語」の中にも発見される「高校」の意味をそれとなく感じ受け止め、逆に強く「やめたい」と思うほどの状況にもとりあえずは直面せず、自分の生活の「習慣」として「高校」という現実が構成されている。そんな感じである。

ただ「高校」は、2年生までのAくんにとっては、ある種の「スピンオフ・ストーリー」である。大きな物語としての「高校」というプロット(筋立て)が、「進路」という形で圧力化される中で、入学前から描かれたストーリーというのではなく、事後的に整理される「振り付けられた」展開に、まだ同化することもできず、現実として広がるのは、場面あるいは出来事への没入である。

「高校期」を貨幣のように交換機能を持つ「財」として「後出し」で意味付けることに苦しみ、しかしながら、徐々に「スピンオフ・ストーリー」を通して、大きな物語を描くためのエネルギーを蓄積しているように見えるのである。

このように、中途退学する子どもたちだけでなく、在学している子どもたちにとっても、「何にでもなる」が、「何にでもならない」可能性をいつも持っているという、不安定な磁場、これが「高校」というものの現実ではなかろうか。このような中で、Aくんは、語り合う、あるいは関数を紡ぎ合う人々を実に豊富に有している。彼の強みは、インタビュー実施者のBをはじめ、「地元」の仲間を含め、中学校から高校へという発達の時間とともに、出会いの場とつながる人間の量や種類が増えていることである。外部に対する「感度」の高さが、おそらくそのことを支えている。また、そうした「感度」の高さは、これもまた、おそらく小さい頃からの環境の中で身につけてきたものなのであろう。「感度」と「出会い」のポジティブなはずみ車の回転は、逆に反対回転のネガティブなはずみ車の存在をも予想させるところである。ここには「考える」という、回転方向を誘う作用が、大きな役割を果たしている。Aくんに見られたのは、このような背景の確かさであり、そこに広がっている生活世界の確かさなので

あろう。

A くんの話は、ひとつの「スピンオフ・ストーリー」から、ドミナントなストーリーへの展開を図っているかのようであった。しかし、もちろんその試みが成功したり、あるいは安定するかどうかはやはり今のところわからない。しかし「交換」としての「高校」の時間ではなく、「目的」としての「高校」の時間に、例えばサッカーへの没入など、性質がより顕著になってきたことは確かである。このような「高校」をめぐる、あるいは「在学」をめぐるストーリーテラーとしての子どもを主体を、社会はいま、どのようにあらたに支えていくことができるのだろうか。「つながり」の支援が求められる所以であると思われる。

(6)以上の結果からは、改めて、必ずしも学力問題だけによらず中退した者が、液状化するライフコースの中で自らの進路を選択しようと模索しながら、それを支える支援の資源や環境が見つげにくい現状、「ケイパビリティ」の不足が、在校生にも見て取れる。在学した高校や家庭等の資源や経験知に依拠した中退者の進路選択が行われやすいものの、それを活動に移すための「ケイパビリティ」(将来的な移行可能性への媒介となる環境)が重要になるとみられる。相談・支援できる他者との関係づくりを介して選択のチャンスを活かせる環境作りが求められる。

<引用文献>

- ① 古賀正義、進路未決定高卒者に関する研究—困難地区の進路多様校や特色校での3年間のパネル調査を中心に—、中央大学『教育学論集』58巻、pp.1-28、2016
- ② 古賀正義、高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査から—、『教育社会学研究』96集、pp.47-67、2015
- ③ 古賀正義、都立高校生の進路選択過程に関する継時的研究—困難地区の進路多様校や特色校等を事例として—、中央大学教育学論集第57集、pp.13-42、2014
- ④ 古賀正義、液状化するライフコース—都立高校中退者調査からみた中退問題と支援、早稲田大学・社会学会『社会学年誌』第55号、pp.3-18、2014

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 18件)

- ① 松田恵示、一人一人の児童・生徒の育ちを学校・社会で支え、そして自立へ—東京都「不登校・中途退学対策検討委員会報告書」から—2、『月刊生徒指導』、査読なし、pp.14-17、2016
- ② 古賀正義、高校中退者の排除と包摂—中退後の進路選択とその要因に関する調査

から—、『教育社会学研究』96集、査読あり、pp.47-67、2015

- ③ 古賀正義、進路未決定高卒者に関する研究—困難地区の進路多様校や特色校での3年間のパネル調査を中心に—、中央大学『教育学論集』58巻、査読なし、pp.1-28、2016

[学会発表] (計 18件)

- ① 古賀正義、都立高校生の進路選択過程に関する継時的研究—困難地区の進路多様校や特色校を事例として、日本社会学会、2015年9月19日、早稲田大学(東京都・新宿区)
- ② 松田恵示、「弱い絆」と「強い絆」の強みと弱み—公立中学校における教育困難性のケーススタディー、日本教育社会学会、2015年9月9日、駒澤大学(東京都・世田谷区)
- ③ 山田哲也・飯島裕子・濱沖敢太郎、高校中退経験にみる社会的包摂/排除、第86回日本社会学会、2013年10月12日、慶應義塾大学(東京都・港区)

[図書] (計 5件)

- ① 古賀正義・山田哲也編著、放送大学振興会、現代社会の児童生徒指導、2017、314

[その他]

ホームページ等

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~km7643/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 恵示(MATSUDA Keiji)
東京学芸大学, 教育学部, 教授
研究者番号: 70239028

(2) 研究分担者

古賀 正義(KOGA Masayoshi)
中央大学, 文学部, 教授
研究者番号: 90178244

山田 哲也(YAMADA Tetsuya)
一橋大学, 社会学研究科, 准教授
研究者番号: 10375214

山本 宏樹(YAMAMOTO Hiroki)
東京電機大学, 理工学部, 助教
研究者番号: 20632491

(4) 研究協力者

牧野 智和(MAKINO Tomokazu)
盛満 弥生(MORIMITSU Yayoi)
村上 徹也(MURAKAMI Tetsuya)